

フィリピンの大学との国際プログラムの教育効果の可視化と二国間比較
ー対面とオンラインの比較検討ー

高橋大生^{*) 1)}, 有蘭信一¹⁾, 金原一宏¹⁾, 俵祐一¹⁾, 矢部広樹¹⁾, 田中なつみ¹⁾, MARY AUDREY
D. VILORIA²⁾, Ryan Dean Sucgang²⁾, 大城昌平¹⁾
¹⁾ 聖隷クリストファー大学, ²⁾ Mariano Marcos State University

【背景】

本学では「国際的な保健医療福祉の課題解決」ができるグローバル人材の育成を目的とし、フィリピンのマリアノ・マルコス州立大学（MMSU）と連携して教育活動を行っている。本研究では、本学教員が MMSU での対面講義および日本からオンライン講義を実施し、異なる講義形式による学生の情動的・心理的变化に及ぼす効果を比較した。

【方法】

調査対象は MMSU 理学療法学科 2 年生 16 名および 3 年生 27 名とした。本学教員が座学と実技を含めた講義で、講義内容は「頸肩腕部の慢性疼痛に対する実践的な理学療法」を MMSU で対面講義、日本からのオンライン講義を実施した。教育効果の評価には BEVI（Beliefs, Events, and Values Inventory）を用い、講義前後での回答をオンライン上で収集した。BEVI は、学生の心理的・情動的特性の変化を評価するツールである。また、満足度や内容理解については 5 段階リッカート尺度で評価し、各項目の変化量を比較検討した。

【結果】

BEVI の結果、対面講義の方がオンライン講義に比べて“自分に対する確信”と“基本的な決定論”の項目で有意に高い変化量を認めた ($p<0.05$)。満足度および内容理解においては、両形式間で差を認めなかった。

【考察】

MMSU での対面講義では、学生が自己効力感や意思決定に関する確信や、ものごとの因果関係や意義などを熟考する度合いを示す“基本的な決定論”をより高めたことが示唆された。これは、教員と直接交流することで学生の内面的な変化が促進されたためと考えられる。国外の教員との交流もオンライン講義で容易になったが、国外においても直接対面によるコミュニケーションによる得られるものが理学療法教育では重要であるとする。

倫理審査	■承認番号（ 24041 ） □該当しない
利益相反	■なし □あり（ ）